有備則患無の
石碑が語る

阿弥陀川砂防堰堤

中国地方の霊峰大山は東西約 30㎞、南北約 25㎞にわたる巨大な山体を見せていますが、すでに解体過程に入っているため、中央円頂丘より放射する渓流に沿って、大量の土砂を下流に流しています。

この大山における治山事業としては、古くは大山寺開創時金蓮上人が金門を開いて集落を護ったのが最初といわれていますが、本格的な工事は大正 6 年（1917）、林野庁の直轄事業として施工された佐陀川上流の金門峡堰堤（H=10 m、L=10 m）です。その後、昭和 7 年（1932）内務省において農村匡救事業が計画されたなかで、砂防事業は農民救済の最も適した儀業であるとして、鳥取県内 7 渓流で砂防工事に着手されました。

西伯郡大山町を流れる阿弥陀川は剣谷（けんだに）に発し、飯戸川（たたらどがわ）・坊領川（ぼうりょうがわ）・川手川（かわてがわ）の 3 川を合流しながら北西に流れ、名和町との境界をなしながら日本海に注ぐ、2 級河川です。河口付近の海から阿弥陀仏が発見されたこと、あるいは剣谷のあみだ岩に源を発することが、川名の由来と言われています。

この阿弥陀川は大山の源からほぼ一直線に日本海に入るため、県内でも有数の暴れ川で、流域の住民は度重なる災害に悩まされていました。そこで、当時県会議員であった中津尾勇夫氏が農林水産省に相談したところ、山林局治水専門技官であった赤木正雄氏が紹介されました。こうして赤木氏の助言・指導により、阿弥陀川筋大山地区の砂防堰堤を始めとした県下の河川が整備されていきました。河口から上流約 8km の阿弥陀川と飯戸川との合流地点から 1.6km の区間に、戦前（昭和 8 年から 16 年）に建設された堰堤が 17 基あります。

赤木氏は昭和 7 年から始まった阿弥陀川治水砂防事業など、鳥取県下の各河川工事の援助と指導を行いました。こうした功績に対し、地元民が中心となって大山町佐摩に 36 年 4 月に石碑が建立されました。表面に「有備則患無（そなえあればうれいなし）」、裏面に我が国砂防事業の礎を築いた赤木氏の功績を後世に伝えると刻まれています。

■位置図

金門
金蓮上人に続き、大正 6 年 (1917 年)、鳥取県最初の近代的な砂防設備が整備された地である

河口から上流約 8km の阿弥陀川と飯戸川合流地点から 1.6km の区間の 17 基は、戦前（昭和 8 年から 16 年）に建設された。

「有備則患無（そなえあればうれいなし）」
赤木正雄博士の功績を讃え、感謝の意を込めて地元住民が中心になって、昭和 36 年建立された石碑